

ギニアグラス新品種「ナツコマキ」の播種期と最適播種量					
[要約] 細茎でロールベール適性が高いギニアグラスの新品種「ナツコマキ」を福岡県で栽培する場合、 <u>播種期</u> は7月中旬で、 <u>播種量</u> 1~2kg/10a程度を <u>散播</u> する。					
担当部署	畜産環境部・飼料チーム			連絡先	092-925-5177
対象作目	飼料作物	専門項目	栽培	成果分類	技術改良

[背景・ねらい]

牧草の省力的収穫調製技術であるロールベラ・ベールラッパ作業体系の普及に伴い、暖地型牧草であるギニアグラスの普及が期待されている。しかし、これまでのギニアグラスの品種は発芽、初期生育が劣るため、夏雑草との競合に弱く、また、太茎であるため収穫・調製作業も困難であった。近年、細茎でロールベール適性が高く、踏圧抵抗性も強いギニアグラスの新品種「ナツコマキ」が育成され、平成14年の成果で飼料成分と消化特性を明らかにしている。しかし、福岡県における栽培特性については不明な点が多い。

そこで、「ナツコマキ」の栽培特性を明らかにし、本県の気象条件に適した栽培技術を確立する。
(要望機関名：畜産課(H10))

[成果の内容・特徴]

1. 「ナツコマキ」は「ナツカゼ」、「ガットンパニック」に比べて初期生育性が優れており、播種後1ヶ月で草丈が100cm程度に達する(図1)。
2. 7月播種に比べ、5月播種は1、2番草ともに収穫時の草丈は高くなるものの、茎数及び乾物収量は著しく減少し、雑草割合が大幅に増加する(表1)。
3. 播種量の増加に伴い、稈径は小さくなり茎数は増加する傾向にあるが、合計乾物収量には播種量の違いによる大きな差は認められない(表2)。このため、7月に播種する場合の播種量は1~2kg/10a程度で十分である。
4. 散播と条播を比べると、草丈は条播のほうが高くなるが、稈径は散播のほうが小さくなる傾向がみられる。一方、合計乾物収量には播種法の違いによる差はほとんどなく、7月に播種する場合、条播して中耕除草する効果は認められない(表2)。

[成果の活用面・留意点]

1. 「ナツコマキ」を利用した作付計画を立てる際の参考として活用できる。
2. 耐湿性が強くないので圃場は排水に留意する。

[具体的データ]

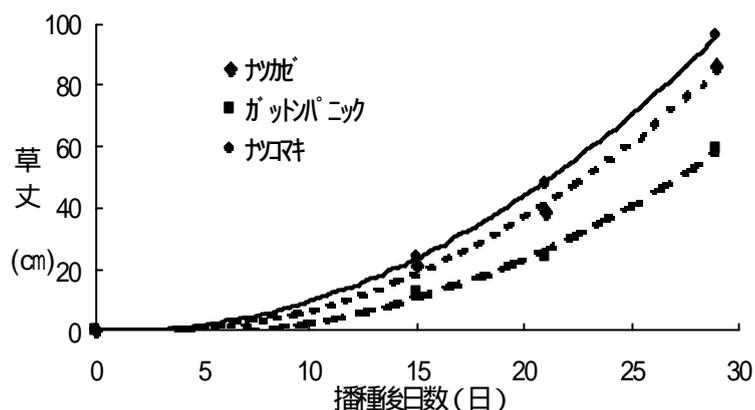


図1 ギニアグラス品種別草丈の推移 (2000年)

注) 播種日: 7月13日

表1 ナツコマキの播種期別栽培特性 (2002年)

項目	草丈(cm)		稈径(mm)		茎数(本/m ²)		牧草乾物収量(kg/10a)			雑草割合(%)		
	1番草	2番草	1番草	2番草	1番草	2番草	1番草	2番草	合計	1番草	2番草	合計
5月21日	136	124	2.7	2.6	57	160	226	395	621	65.7	22.9	46.2
7月18日	113	114	2.2	2.0	188	310	377	540	917	26.7	0.0	13.0

注) 1. 播種法: 散播、播種量: 1kg/10a、施肥: 基肥(N:P₂O₅:K₂O=10:10:10)、追肥(N:P₂O₅:K₂O=7:0:7)

収穫: 5月21日播種の1番草 7月24日(出穂始)、2番草 8月22日(出穂始)

7月18日播種の1番草 8月28日(出穂始)、2番草 10月8日(出穂)

2. 雑草割合: 乾物総重量に対する雑草乾物重量の割合(%)

表2 ナツコマキの播種量、播種法と栽培特性 (2002年)

項目	草丈(cm)		稈径(mm)		茎数(本/m ²)		乾物収量(kg/10a)		
	1番草	2番草	1番草	2番草	1番草	2番草	1番草	2番草	合計
処 理									
・播種量(kg/10a)									
1.0	123	123	2.6	2.4	193	281	391	518	909
2.0	118	121	2.6	2.3	201	322	438	586	1,024
4.0	117	118	2.2	2.1	208	415	440	515	955
・播種法									
条播	123	123	2.6	2.4	193	281	391	518	909
散播	113	114	2.2	2.0	188	310	377	540	917

注) 1. 播種日: 7月18日、播種法: 散播あるいは条播(条間50cm)とし、4~5葉期に中耕除草を行った。

播種量: 1kg/10a(条播区、散播区)、施肥: 基肥(N:P₂O₅:K₂O=10:10:10)、追肥(N:P₂O₅:K₂O=7:0:7)

収穫: 1番草 8月28日(出穂始)、2番草 10月8日(出穂)

[その他]

研究課題名: 転作水田における牧草の周年利用作付体系

予算区分: 国庫助成(先端技術)

研究期間: 平成14年度(平成11~14年)

研究担当者: 井上信明、家守紹光、馬場武志、藤吉弘子

発表論文等: 平成14年度畜産関係試験成績書